審 査 結 果 の 要 旨

（１） 研究の目的に意義や独創性があるか。

通常学級においては、学習障害（Learning Disorder, LD）を含む、様々な背景から読み書き困難が生じている児童に対して、教育的対応を行う必要性が指摘されている。特に漢字書字に関しては、前学年の学習漢字の習得が未達成な者が、一定程度存在することが報告され、通常学級における漢字書字の重度低成績の背景要因に関する研究の必要性が指摘されている。漢字書字の重度低成績には、語彙形成や漢字の読み習得などの背景要因が複合して関与する。これより本論文は、通常学級に在籍する小学生の漢字書字の重度低成績の背景複合要因について、検討を行った。

第 1 章では、通常学級児童における漢字書字低成績の特徴に関する先行研究を概観し、漢字書字低成績の背景リスク要因は、教育支援を行う上で有用な情報となることを論じた。また児童における背景リスク要因を評価することで、クラスワイドの一斉支援を行う必要性を明らかにできることを指摘した。これに基づき本論文の目的を論じた。

第 2 章では、小学 2～6 年生 3057 名を対象に、漢字書字の重度低成績の背景リスク要因を多重ロジスティック分析により検討した。在籍学年の前学年の漢字書字テストの重度低成績(5 パーセンタイル以下)を目的変数、漢字読字テスト及び基礎スキルテスト（特殊音節、流ちょうな平仮名読み、部首，筆順に関するテスト）、言語性短期記憶テスト、視覚性記憶テストの低成績(10 パーセンタイル以下)を説明変数とした。その結果、小学 2～6 年生で、漢字読字が低成績を示す者で漢字書字の重度低成績を示す率は、漢字読字が低成績を示さない者で漢字書字重度低成績を示す率と比べて著しく高くなることをオッズ比の検討から明らかにした。これより漢字読字の低成績は、漢字書字の重度低成績の背景リスク要因となることを指摘した。また特殊音節の習得や部首知識の低成績が複合した場合には、漢字書字の重度低成績のリスクが高いことを明らかにした。

第 3 章では、小学 2～6 年生 1398 名を対象として、漢字書字困難に、漢字読字と語彙の低成績がどのように関与するのか検討した。その結果、漢字書字の低成績を示し、合わせて漢字読字と語彙の低成績を示す児童では、流暢な平仮名読みと言語性ワーキングメモリの低成績が、複合して背景要因になることを指摘できた。漢字読字と語彙が低成績を示さず、漢字書字のみの低成績を示す児童では、言語性ワーキングメモリの低成績が背景要因として関与することを指摘できた。このことから、言語性ワーキングメモリの低成績は、漢字書字低成績の強いリスク要因であることを指摘した。

第 4 章では、小学 2 年生 276 名を対象として、漢字読字書字についてクラスワイド支援を実施し、その効果を検討した。漢字の読字書字の低成績が同程度であっても、読み書きの基礎スキルの低成績の複合が少ない場合には、支援効果が大きいことを指摘できた。

第 5 章の総合考察では、背景リスク要因の複合個数により、学習支援の効果が異なることから、通常学級での実態把握に基づくことで、クラスワイドの教育支援が効果的になることを指摘し、支援の具体的手続きについて提案した。

本論文は、通常学級における漢字書字低成績の背景要因を明らかにし、その支援方策について提案した点で、教育および臨床上の意義がある。本論文は、通常学級各学年約 500～700 名の児童を対象として調査を実施し、漢字書字の重度低成績の背景要因が漢字読字の低成績であること

を明らかにし、さらにクラスワイドの教育支援の効果が、背景リスク要因の複合の程度と関係することを明らかにした点に、本論文の独創性が認められる。

（２） 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文では、発達心理学や特別支援教育学の領域における代表的な研究方法が用いられている。また、医学や疫学においてリスク要因の解析に用いられる多重ロジスティック回帰分析を、漢字書字低成績のリスク要因の解析に用いた。これらの分析は、基本的な手続きに沿って行われた。本論文の方法は研究目的に合致し、当該学問分野で妥当なものであると評価できる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文は、3057 名と 1398 名のテスト調査に基づく検討を行った。また 276 名に対して支援を実施し、その結果に基づき支援効果を検討した。これよりデータ分析の精度が確保されていることを指摘できる。データ収集に際して対象児の人権に対する配慮が十分になされたことを指摘できる。調査実施と研究発表に関しては、教育委員会と小学校長の承諾を得た。調査と研究の趣旨を保護者に文書で伝え、小学校を通して研究協力と結果発表の同意を得た。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

本論文の結論において、小学 2～6 年生を対象に漢字書字の重度低成績のリスク要因が漢字読字の低成績であることを明らかにした。これらの知見は、従来の研究において十分報告されておらず、本研究で詳細に明らかにされたものである。その点で学術的な水準に達していることを指摘できる。さらに、小学 2 年生の漢字読字書字の教育支援に関する研究を行い、背景リスク要因の複合個数と支援効果との関係を明らかにした。このことは、通常学級における学習支援を計画する上で重要な知見であり、学術的水準に達していることを指摘できる。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文で示された通常学級における漢字書字低成績のリスク要因についての提案は、通常学級における学習支援を計画する上で、きわめて貴重である。また、本論文で示された漢字読字書字の支援効果に関する研究成果は、通常学級ならびに通級による指導での学習支援の基礎的知見となるものである。これより、本論文は、取得学位にふさわしい意義を有し、特別支援教育の展開に成果をもたらすものであることを指摘できる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員が一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与にふさわしいとの評価を行った。